The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Soft Tissue Sarcoma of the Pleural Cavity
Author(s)	名井, 陽
Citation	大阪大学, 1993, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/38170
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

氏　　名	名（みょう）　井（い）　陽（あきら）
博士の専攻分野の名称	博　士（医　学）
学　位　記　番　号	第　10641　号
学位授与年月日	平成5年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 医学研究科病理系専攻
学　位　論　文　名	Soft Tissue Sarcoma of the Pleural Cavity **（胸膜発生軟部肉腫の臨床病理学的検討）**
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　北村　幸彦 （副査） 教　授　小野　啓郎　　教　授　越智　隆弘

論　文　内　容　の　要　旨

（目　　的）

軟部肉腫の発生原因については十分な研究がなされておらず過去に軟部肉腫の発生と関連が報告されたものとしては，皮膚潰瘍，熱傷瘢痕，外傷あるいは手術の瘢痕，金属，プラスチック，セラミックなどの生体内人工材料，骨髄炎，骨折，放射線，農薬，ウイルスなどが報告されているが，まとまった数の報告は放射線治療に関連したものとAIDSにおけるカポシ肉腫だけである。我々の最近の研究により慢性結核性膿胸を母地としてB細胞性リンパ腫が多く発生することが明らかとなったが文献的には慢性膿胸に軟部肉腫が発生することも報告されている。胸膜は軟部肉腫の発生は稀な部位であるが国立療養所近畿中央病院で1971年から85年の間に慢性結核性膿胸の治療を受けた134人のうち2人に軟部肉腫の発生が認められた。我々が大阪及び兵庫の病院より収集した433例の軟部肉腫には胸膜発生例は1例もなかったことから膿胸を母地とした軟部肉腫の発生は非常に高率と言える。このことから胸膜に発生する軟部肉腫の危険因子としての慢性膿胸の意義を明らかにする目的で全国調査を行った。

（方　　法）

本邦の胸部疾患関係の雑誌，最近11年分を調べ胸壁あるいは胸腔内に発生したと思われる報告例を抽出して各施設に症例の提供を依頼し，17施設の協力を得て27例の胸腔内発生軟部肉腫を収集した。これら27例について，担当医を訪問しカルテ，画像診断所見を詳細に検討した。発生由来組織については，胸部X線，CT，手術所見，剖検所見を参考にして周囲の血管，神経，筋肉などから発生したものを除外した。組織学的診断は通常のhematoxylin-eosin染色を用い，必要に応じてPAS，alcian blue，渡銀法，免疫組織化学染色を併用した。免疫組織化学染色ではdesmin，myoglobin，血液凝固第8因子，lysozyme，α 1-antitrypsin，α 1-antichymotrypsin，κ 及び λ chain，EMA，CEA，cytokeratin，S-100蛋白に対する抗体を用いABC法により行った。

（成　　績）

胸腔内発生軟部肉腫として集められた27例のうち10例は発生由来組織，組織学的診断の検討の結果除外され，17例が胸膜発生軟部肉腫と考えられた。胸膜軟部肉腫17症例の発症年齢は平均58歳，男女比は13：4であった。8例は慢性膿胸，慢性胸膜炎など胸膜の慢性炎症性疾患を現病あるいは既往症として有しており肉腫発生時点での罹病期間は15～50年（平均28.8年）であった。喫煙歴を有する患者は6例でアスベスト暴露歴を有する症例はなかった。症状は胸痛が最も多くこれに胸壁腫瘤，および咳嗽，喀痰，血痰などの呼吸器症状が続いていた。画像診断及び手術，

剖検所見から判断した腫瘍の進展様式は胸膜から胸腔内へ向かうものが最も多くみられた。遠隔転移は初診時には全例認められなかったが臨床経過中に半数以上で肺，副腎，消化管などへの転移がみられた。17 例中 13 例は手術，化学療法，放射線療法などの治療を受けたが，13 例は治療開始後平均 14.2 ケ月で腫瘍死しており 1 年生存率は 38.5 % であった。胸膜発生軟部肉腫 17 症例の組織学的分類では，全体としては通常型の MFH が 11 例と最も多く血管肉腫の 4 例がこれに続いた。胸膜慢性炎症性疾患を有する 8 例においては MFH 5 例，血管肉腫 3 例であった。その他の組織学的特徴としては核分裂像が比較的少ないこと，好中球またはリンパ球を主とする炎症細胞浸潤の強い症例が多かったことが挙げられた。

（総　　括）

軟部肉腫は比較的希な疾患でその発生率は 10 万人に 1.35～2 人と考えられておりまた胸腔内に発生する例はきわめて少ないが近畿中央病院での 134 人の慢性結核性膿胸患者のうち 2 人に胸腔内軟部肉腫の発生をみたことは通常の母集団に比べ約 1000 倍の高率発生といえる。また，今回得られた 17 例の胸膜発生軟部肉腫のうち 8 例に胸膜慢性炎症性疾患の病歴があったことは注目すべき事実である。このように胸膜発生軟部肉腫は膿胸患者で高率に発生し，また胸膜発生軟部肉腫では膿胸など胸膜の慢性炎症性疾患を有している頻度が高いことから長期にわたる胸膜の炎症が胸膜の軟部肉腫の発生原因の 1 つであることが示唆された。

論文審査の結果の要旨

軟部肉腫は頻度の少ない疾患ありしかも胸腔内発生例は極めて少ない。本研究は慢性膿胸の経過中に比較的高頻度に胸腔内軟部肉腫の発生をみることがあるのに着目し軟部肉腫の発生母地としての慢性膿胸の意義を明らかにするため全国調査を行ったものである。その結果では胸膜発生軟部肉腫の半数近くに胸膜の慢性炎症性疾患の合併があり，胸膜の慢性炎症と肉腫発生との濃厚な関連を明らかにした。本研究が明らかにしたものは，即ち，炎症を母地とした腫瘍発生の重要なモデルと考えられ，今後腫瘍の病因解明に貢献しうる価値ある研究であり学位論文にふさわしいと考える。